

2018年度事業報告

I 法人の概要

【1】 建学の精神

世界音楽並ニ音楽ニ関連セル諸般ノ芸術ハ之ノ学校ニヨッテ統一サレ
新音楽新歌劇ノ発生地タランコトヲ祈願スルモノナリ

【2】 学校法人の主な沿革

1915年（大正4年）	創立者永井幸次により、大阪市南区塩町（現、中央区南船場）に大阪音楽学校を開校
1926年（大正15年）	大阪市東区味原町（現、天王寺区味原本町）に移転
1948年（昭和23年）	大阪音楽高等学校開校
1951年（昭和26年）	大阪音楽短期大学開学
1954年（昭和29年）	豊能郡庄内町野田（現、豊中市庄内幸町）の現校地に移転
1957年（昭和32年）	附属児童音楽学園開設
1958年（昭和33年）	大阪音楽大学開学 大阪音楽高等学校を附属音楽高等学校に改称
1959年（昭和34年）	大阪音楽短期大学を大阪音楽大学短期大学部に改称
1966年（昭和41年）	音楽文化研究所開設（のちに音楽研究所に改組） 附属児童音楽学園を附属音楽学園に改称
1967年（昭和42年）	大学と短期大学部に各音楽専攻科設置 附属音楽幼稚園開設
1968年（昭和43年）	大学院音楽研究科開設 附属楽器博物館開設
1980年（昭和55年）	K号館竣工（音楽文化研究所、附属楽器博物館を移転）
1981年（昭和56年）	附属音楽高等学校閉校
1989年（平成元年）	ザ・カレッジ・オペラハウス開館
2000年（平成12年）	P号館（ミレニアムホール）竣工
2002年（平成14年）	音楽博物館開設（附属楽器博物館、音楽研究所などを統合して改組）
2003年（平成15年）	附属音楽院を開設（附属音楽学園を改組）
2004年（平成16年）	短期大学部を改組、新たにジャズ・ポピュラー専攻開設
2009年（平成21年）	短期大学部を改組、音楽科の下に11コースを置く
2011年（平成23年）	短大専攻科を音楽専攻の1専攻に改組

2012年（平成24年）	大学音楽学部作曲学科・声楽学科・器楽学科の3学科を廃止し、音楽学科1学科を新設、ジャズ・クラシックギター・電子オルガン専攻を開設、短期大学部音楽科にクラシックギター・ダンスパフォーマンスコースを開設
2015年（平成27年）	大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部が公益財団法人日本高等教育評価機構による大学・短期大学機関別認証評価の結果、「大学評価基準・短期大学評価基準に適合している」と認定を受ける
2016年（平成28年）	音楽学部音楽学科にミュージッククリエーション専攻・ミュージックコミュニケーション専攻を開設 100周年記念館（新K号館）竣工
2017年（平成29年）	音楽博物館を大阪音楽大学メディアセンター楽器資料館と改称 附属音楽院さくら夙川校を開設

【3】 役員・教職員の概要

理 事

理事定数10～15名 理事の現員数10名

理事長	中村 孝義	理事	北野 徹
副理事長	本田 耕一	理事	田中 勉
常任理事	岡野 幸義（2018年4月1日付就任）	理事	永井 譲
常任理事	十川 輝明	理事	福井 慎吾
常任理事	中上 善生	理事	本山 秀毅（2018年4月1日付就任）

監 事

監事定数 2名 監事の現員数2名

花岡 浩二
水瀨 征矢雄（2018年6月30日付就任）
小林 慶成（2018年6月29日付退任）

評議員

評議員定数 21～31名 評議員の現員数22名

荒田 祐子	田中 勉
井上 建夫 (2018年6月30日付就任)	谷口 伸夫
岡原 慎也	土井 洋三 (2018年6月29日付退任)
小畑 有子	中村 孝義
金田 忠行	西山 健次
川上 孝子 (2018年6月29日付退任)	福榮 宏之
北野 徹	松尾 徹
木村 寛仁	松尾 昌美 (2018年6月29日付退任)
小林 義和 (2018年6月30日付就任)	松原 千代繁
坂口 尚平	丸谷 明夫
崎山 和英	水谷 雅男 (2018年6月30日付就任)
芝 道雄 (2018年6月30日付就任)	本山 秀毅
千 宗守 (2018年6月29日付退任)	森本 徹

大学長及び幼稚園長

大阪音楽大学学長	本山 秀毅
大阪音楽大学短期大学部学長	本山 秀毅
大阪音楽大学附属音楽幼稚園長	小畑 有子

【4】 設置する学校・学部・学科等 及び 入学定員、学生数の状況（在籍数は2018年5月1日現在）

●大阪音楽大学 音楽学部

学 科	入学定員	3年次編入 入学定員	収容定員	在籍数
音楽学科	210名	30名	900名	757名
計	210名	30名	900名	757名

●大阪音楽大学 音楽専攻科

専 攻	入学定員	在籍数
作曲専攻	1名	0名
声楽専攻	5名	7名
器楽専攻	14名	17名
計	20名	24名

●大阪音楽大学 大学院

研究科	専攻	入学定員	収容定員	在籍数
音楽研究科	作曲専攻	2名	4名	2名
	声楽専攻	4名	8名	12名
	器楽専攻	7名	14名	17名
計		13名	26名	31名

●大阪音楽大学短期大学部

学 科	入学定員	収容定員	在籍数
音楽科	100名	250名	243名
計	100名	250名	243名

●大阪音楽大学短期大学部 専攻科

専 攻	入学定員	在籍数
音楽専攻	15名	10名

●大阪音楽大学附属音楽幼稚園

学 年	定 員	在園児数
3歳児3学級	105名	97名
4歳児3学級	105名	99名
5歳児3学級	105名	102名
計	315名	298名

II 事業の概要

1. 理事長の諮問による「将来構想実現検討・諮問委員会」が組織され、指名された教職員をメンバーとして本学の将来あるべき姿とそのための具体的な方策を議論した。大学・短大の「遠隔地出身者支援給付奨学金」は2019年度入学者から適用し、短大の「作曲デザイン・コース」「ヴォーカルパフォーマンス・コース」「ポピュラーインストゥルメント・コース」は2020年度に開設することを決定した。また、「将来構想実現検討・諮問委員会」は最終答申の提出を以て解散し、その機能は「新規事業開発室」へと引き継ぐことを決定した。
2. 教員の教育、教学運営の充実、研究活動の発展、大学・法人運営力の向上及び執務意欲の向上を目的とした教員評価制度の導入を決定した。今後は2018年度のトライアル期間を経て、2019年度より正式に開始する。
3. 2019年度に完成年度を迎える大学の「ミュージックコミュニケーション専攻」所属の学生による企画「阪急電鉄 路線リレーコンサート（仮称）」をスタートすることを決定した。今年度は、実行委員会の立ち上げのため宝塚線の主要駅周辺に点在するコンサートホールや大学、商業・公共施設などに参加の呼びかけを行った。今後は2019年度にプレイベントを行い、2020年度に本イベントを開催する計画を立て、沿線地域のより音楽文

化の豊かな発展に寄与するとともに、地域コミュニティやネットワークが音楽によって更に活性化することを
目指す。

4. ミラノ・ヴェルディ音楽院と姉妹校提携を締結した。今後は教育・研究、その他領域において芸術と文化の交流を行う。姉妹提携校は6カ国8大学となった。
5. 2017年度から始まった3人の演出家が年替わりで演出する「ディレクターズチョイス」シリーズ。その第二弾となる第54回オペラ公演は、栗國淳が演出を担当し、森香織指揮のもと、メノッティの《テレフォン》《泥棒とオールドミス》を11月2日と11月4日にザ・カレッジ・オペラハウスで上演した。公演は盛況のうちに終演し、2019年度（第三弾）の演出を担当する岩田達宗へと引き継がれた。また、同公演は2018年度（第39回）音楽クリティック・クラブ賞を受賞した。
6. 12月8日にザ・シンフォニーホールにおいて、井上道義指揮のもと第61回大阪音楽大学定期演奏会を開催した。ショスタコーヴィチの祝典序曲で幕が開き、本学特任教授の漆原朝子によるプロコフィエフのヴァイオリン協奏曲第1番のほか、ショスタコーヴィチの交響曲第10番が披露され、演奏会は盛況のうちに終演した。
7. 1月19日にザ・シンフォニーホールにおいて、フィリップ・スパークの指揮のもと第50回吹奏楽演奏会を開催した。前回に続き、全曲自作品となる今回は「マドリガラム」で幕が開き、「交響曲第2番『サヴァンナ・シンフォニー』」のほか、アンコール2曲を含む全9曲が披露され会場は多くの観客で埋め尽くされた。
8. 教育職員免許法及び同法施行規則の改正により、現在認定されている本学全ての教職課程（短大・大学・音楽専攻科・大学院）について文部科学省への再課程認定申請を行い2019年4月1日以降、新たな基準に基づく教職課程として認定を受けた（2019年1月25日付通知）。
9. 2020年度の大阪成蹊女子高等学校の音楽コース新設を機に、学校法人大阪成蹊学園と連携協力に関する協定を締結した。今後、両法人による音楽活動及び音楽教育の更なる充実並びに大阪における音楽文化の振興のため相互協力を行う。
10. アルヌルフ・フォン・アルニム、菊本和昭、中村恵理、ファブリス・モレッティが客員教授に就任した。

以下 内は事業名を示す。

A 教育・研究事業

【1】大学院・大学・音楽専攻科・短大・短大専攻科

<大学院>

2018年度は作曲研究室1、音楽学研究室1、声楽研究室12、ピアノ研究室12、管弦打研究室5の計31名が在籍。各研究室による修士演奏、修士論文、口述試験の結果、声楽5、ピアノ5、管弦打1の計11名が修了した。大学院生の必修授業である「芸術文化の諸相」では、前期を日本伝統音楽の前川光長、吉阪一郎、左鴻泰弘、谷口正壽、後期をABCテレビアナウンサーの堀江政夫の各氏が担当し、日本文化への理解と舞台上のMCについて学んだ。また大学院定期演奏会を11月19日にザ・カレッジ・オペラハウスにおいて開催し、本学大学院のレベルの高さを内外に示した。教職課程について再課程認定申請が承認された。2019年度入試は、前期、後期合わせて11名が合格した。

<大学>

音楽学部には757名が在籍し、151名（内8名は前期）が卒業した。卒業生の中から、最優秀賞5名、優秀賞10名を表彰した。2018年度から従来のクラシックギター専攻をギター・マンドリン専攻に改称した。教育職員免許法及び同施行規則法の改正に伴い文部科学省に対し、教職課程の再課程認定申請を行い、2019年度からの新たな教職課程開

設の認可を受けた。

<音楽専攻科>

音楽専攻科には24名が在籍し、24名が修了した。「音楽実践演習」として学生自らが企画、演出、出演するオータムコンサートをLICはびきの（10月13日）、洲本市文化会館（10月27日）、西宮フレンテホール（11月17日）の3会場で実施し、社会における実践的活動を体験した。教職課程について再課程認定申請が承認された。

<短大>

音楽科には243名が在籍し、99名（内11名は前期）が卒業した。卒業生の中から最優秀賞3名、優秀賞7名を表彰した。なお、最優秀賞は2018年度より新たに設けられたものである。授業・レッスンの集大成として各コースのコンサートが行われた。教職課程について再課程認定申請が承認された。2020年度より作曲コースと電子オルガンコースを統合して新たに作曲デザイン・コースとして新たにスタートさせること、また、ポピュラー・コースをヴォーカルパフォーマンスとポピュラーインストルメントの2つコースに再編することを決定した。

<短大専攻科>

専攻科には10名が在籍し、9名が修了した。学生が自ら企画・出演する「コンサート・プロデュース」による演奏会を7月17日にミレニアムホールで開催した。

UI活動の再点検とそれに基づく教育改革

●要旨

2015年までに大学として取り組んだ「UI（ユニバーシティ・アイデンティティ）活動」を再認識し、教育、研究の場に生かすことを2018年度から4年間の方針とし、学長のリーダーシップにより「UI活動」の内容をベースにして教育改革を推進した。

●成果及び達成度

音楽の専門領域での教授に関して、本年度トライアル実施された教員による自己評価によりさらに充実が図られ、同時に学内のリメディアル教育やメンタル面での丁寧な対応に対する認知度も高められている。社会に対する存在意義の最もシビアな接点はキャリアの分野であるが、本学のキャリア教育は音楽の専門教育と相乗効果を持ちながら展開され、成果をあげている。卒業生のキャリア支援においても万全の態勢で臨んでいる。2019年度に完成年度を迎えるミュージッククリエーション、ミュージックコミュニケーション両専攻では、従来の専門領域とのコラボレーション（オペラや演奏会の演出、舞台美術など）を試み成功している。

●今後の展望

大学としての具体的な方針は以下のとおりとし、引き続き教育改革を推進する。

・目指す方向性

本学が継承してきた、音楽に対する見識や技術を高めること、世の中に認められる優秀な学生を育成することは堅固に維持しつつ、多様な学生に対応する基礎力の向上、学習支援の充実に努める。

・存在意義

社会に対する存在意義として「ちから強い音楽人」を育成、輩出することを掲げる。高い音楽性や技術はもとより、音楽に対峙する中で得られる忍耐力、集中力、創造力、協調性などを持つ人材を育成することに努める。

・在り方

完成年度を迎える新専攻や100周年記念館を基盤に展開される新しい動きと、伝統的な音楽教育から得られる成果が、対峙しダイナミックに刺激し合うことを通じて、本学の将来の在り方を示すことになる。

ミュージックコミュニケーション専攻 年間イベント

●要旨

豊中市との協働により、専攻発足時より継続しているロビーコンサートを4回にわたり実施したほか、初めての試みとして朗読とピアノによる有料コンサート「はて？サテ？サティ」を1月31日に開催した。広報活動により動員した聴衆は約130人であり、収支は概ね同額となった。また、阪急宝塚線沿線に立地するコンサートホール等を音楽で結ぶリレーコンサートの開催に向けたプロジェクトが始動し、2019年度にプレイベント、2020年度に正式なイベントを行うため、企業や行政の担当者とともにミーティングを重ねた。さらに、過年度より継続する「庄内つくる音楽祭」「水素エネルギー普及」等の他、同志社女子大学との共同によるK-POPアーティストによるコンサートを専攻としてプロデュースした。

●成果及び達成度

プロの声優と本学の専任教員が出演した有料コンサートでは当初チケットの売り上げが伸びず、加えて台本の遅れ等もあり、本番に至るまでに様々な困難があったが、それらを乗り越えて一つのコンサートを無事に終了させることができた。過年度から継続するイベント等については、総じて前年度以上の成果を挙げることができた。

●今後の展望

次年度は有料コンサートを2回開催することになっており、広報活動やチケット販売手法のレベルアップが目標となる。また、阪急電車宝塚線沿線のリレーコンサートは地域社会におけるアートマネジメントの実践となることが期待される。

教員採用及び公務員音楽隊（自衛隊等）採用筆記試験対策講座（Web講座）の実施

●要旨

教員採用試験の受験を目指す者を対象に、教員採用試験筆記試験対策講座を実施した。当該講座は2014年度より本学指定業者によるWeb講座として実施しており、2018年度も同様に一般教養対策、教職教養対策、論文対策、時事対策を含めた講座として実施した。講座実施期間は年度を跨ぎ1月下旬頃から10月にかけて実施している。Web講座は、持続的な学習意欲が重要で、どれだけ教員採用試験への思いが強いかが問われるが、時間を気にせず、自分のペースとスケジュールでの学習が可能という強みがある。科目ごとの契約ではなく、一括契約を結んでおり、受講の学生は受験を希望する自治体で課される課題を中心に学習が可能となっている。また、2015年度から導入した公務員筆記試験対策についても同様に、Web講座として公務員（自衛隊、警察、消防）音楽隊を目指す学生などを対象に実施した。

●成果及び達成度

教員採用試験対策Web講座（教職教養対策全20回、演習編2回）を実施した。Web講座受講者数は継続者を含めて3名（大学2名（内新規1名・継続1名）、短大新規1名）であった。また、公務員試験対策Web講座<自衛隊・消防・警察対策>（警察官・消防官試験対策共通講座全69回、警察官試験対策講座全24回、消防官試験対策講座全20回、演習編全3回）を実施した。Web講座受講者数は2名（大学新規2名）であった。

過年度受講者を含む教員採用試験受験状況は以下のとおり。

<教員採用試験合格者>

・兵庫県1名（2017年度受講生）

<教員採用試験1次合格者>

・大阪府1名（2016年度受講生）・大阪府豊能地区1名（2016年度受講生）

●今後の展望

今年度は Web 講座に加え、外部講師による演習を実施した。受講生は少ないが演習内容の満足度は高かったため、次年度についても Web 講義と演習を合わせた講座展開を検討する。

日本語ライティング支援室の運営

●要旨

学生のキャリア形成におけるライティング能力の重要性の認識と向上のため、文章執筆及びデザイン関係の個別指導や講座、広報誌の発行等を、啓蒙活動も行いながら実施する。また、産学協働人材育成機構「AICE」運営に参画することで、産学の人材育成の現状と課題を共有し、本学におけるインターンシップ等のキャリア教育に知見を反映する。

●成果及び達成度

学生のキャリア形成におけるライティング能力等向上のため以下の事業を実施した。

- ・社会人基礎力育成支援のため、名刺作成講座を8回実施した。
- ・社会人基礎力育成支援のため、日本語ライティング支援室にて文章執筆（レポート、エントリーシート、履歴書、実習のお礼状、音楽活動におけるプロフィール文、進学のための志望理由書等）の個別指導を行った。指導件数は約400件。
- ・学内PBLとして、日本語ライティング支援室発行の広報誌『WRITING NOTE vol. 19』（2018年9月発行）及び『WRITING NOTE vol. 20』（2019年3月発行）に学生記者4名を参加させた。記事作りを通して調査力やコミュニケーション力などを身につけるよう指導した。

また、産学協働人材育成機構「AICE」インターンシップ部会に参加し、4月及び12月の2回において本学のインターンシップの現状と課題を発表し、事例を共有した。

●今後の展望

学生のキャリア形成におけるライティング能力の向上については、キャリア支援センター及び教養教育部会と調整、協働しながらこれからも推進していく。とくに就職活動等の進路に関わる文章指導については、その方法がキャリア支援センターと相違することなく、調整に努め学生支援を進めていく。産学協働人材育成機構「AICE」プロジェクト等については、学生のキャリア形成に有用と思われる企画か否かを見極め、有用と判断したものについては積極的に参画していく予定である。また連携できる企業・自治体・公的機関等があれば本学のニーズに合わせた課外講座等を企画、実施していく。

インターンシップ

●要旨

卒業後の進路を考える上での重要な柱の一つとして、インターンシップを実施した。本学のインターンシップは、音楽大学としての学び・専門性を活かすことができるコンサートホール・楽器店・音楽教室・音楽マネジメント・楽団・スタジオなど、音楽業界の企業・団体等の協力を得て行っている。実施は、夏期（8～9月）、春期（2～3月）の年2回で、1週間～10日程度の就業体験とし、学内面接を経て学生の希望や適性に応じた受入機関へ派遣している。また、派遣前後には事前・事後学習として、受入機関についての企業研究、マナー研修、実習報告会、受入機関へのお礼状送付等の指導を行っている。

●成果及び達成度

インターンシップを次の事柄を目的に実施し、参加人数は以下のとおり。

①大学の人材養成及び教育研究上の目的に含まれる「高い音楽能力と幅広い人間力を備えた、良識ある音楽人」を、音楽現場での実施を通じて育てる。

②職業体験を積み学生が音楽業界の実情や企業・団体の仕組みを理解し、仕事への興味や関心を高める。

③学生が自身の強み・弱みに気づき、適性を客観的に考えることで、進路イメージを具体的に描く。

・夏期：36人（延べ人数）（受入企業：16社）が参加

・春期：36人（述べ人数）（受入企業：17社）が参加

参加学生にとって、イメージと現実との差異や適応性の確認等が行われることにより貴重な体験となり、将来の進路を考えるきっかけの一つになった。

春期では新規受入企業に株式会社プロデュースを加え、参加人数の増加につながった。また、大学コンソーシアム大阪及び兵庫県経営者協会との提携インターンシップのほか、企業独自のインターンシップ（1day含む）情報を提供した結果、制作会社や旅行代理店などへ参加した学生があった。

●今後の展望

2019年度も引き続き年間2回のインターンシップを実施する。特に企業就職希望学生にとっては個人的に企業へインターンシップ受入依頼を行う事例が増えている。このため、音楽系インターンシップ(大学主催)については、学生の希望と受入団体との間の調整を図り、可能な限り対象企業を増やす。(なお、遠隔地等で学生の受け入れが滞っている企業・団体については、受入時期・内容等の精査を行う予定である)。また、一般企業へのインターンシップについては、大学が提携を結んでいる「大学コンソーシアム大阪」「兵庫県経営者協会」に加え、就活情報サイト企業の開催(仲介)するインターンシップへの参加促進も含めて、情報提供、サイト登録等を勧めていく。

キャリア支援講座の企画・実施

●要旨

卒業後の進路を考える上で、必要なマナーの習得や企業就職を目指す学生を対象とした自己分析方法やエントリーシート・履歴書の書き方セミナー、Web模試や面接対策講座に加え、好印象を得る為のリクルートメイク講座、ピアノグレード(演奏・指導)資格取得を目指す学生への対策講座や将来的にTOEIC・TOEFL等資格試験受験にも役立つ英会話講座などの講座を「キャリア支援センター講座」として実施した。また、就職や夢をかなえた卒業生の先輩と直接話ができる座談会形式の「MIRAIカフェ」を6回実施した。実施する講座の決定には、学生のニーズについてアンケート調査を行うなど、定番講座に加えてより希望の多い講座を実施している。これらの講座は、学生各自が考える方向性の検証や再考の契機とし、進路・就職の活動に活かすことを目的としている。

●成果及び達成度

2018年度は以下の7講座を開講した。講座名と参加人数は以下のとおり。有料講座に加え無料講座・セミナーを開催し、参加学生数の増加を図った。

・ヤマハ音楽ピアノ演奏グレード5級取得準備講座(4回)：大学5名、短大4名

・ヤマハ音楽指導グレード5級取得準備講座(7回)：大学6名、短大3名、卒業生2名

・英会話講座(10回)：大学8名、短大3名

・就職志望者対象MIRAIセミナー(8回)：①自己分析・自己PR作成セミナー(2回)：大学11名・短大10名、

②業界研究セミナー(2回)：大学9名・短大5名、③履歴書&ES対策セミナー(1回)：大学8名・短大2名、

④Web模擬試験受験会(1回)：大学2名・短大1名、⑤面接講座(グループディスカッション&個人・集団面接)

(2回)：大学26名・大専2名・短大1名

・就活メイク講座(1回)：大学3名・短大4名

・And Vision主催音楽留学セミナー(2回)：大学17名・短大4名

・MIRAI カフェ (6回) : 大学 15名・短大 4名

上記以外にも企業就職志望者を対象とした「SPI 性格検査」や「証明写真撮影会」、音楽教室開設希望者を対象とした「音楽教室 how-to セミナー」や「ヤマハ音楽指導グレード 5 級トライアル講座」などを実施した。2019 年度就活に向けた相談や履歴書・エントリーシート添削、面接練習希望も増えており、これらの講座やセミナー等の効果があった。

●今後の展望

ヤマハグレード対策等の講座に加え、学生アンケートの結果を検討して新しい講座（保育士資格試験対策講座）を開催する。また、音楽系を含む企業就職を希望する学生が増加傾向にあることを考慮して、就活に活かせる講座、セミナーの回数を増やす事によって内容の充実を図る。中でも面接講座については、グループディスカッション、集団面接など試験の形式に分けて実施する。さらに、企業が行う夏期インターンシップについても就活情報企業（マイナビ、リクルートキャリア、学情等）と協力して情報提供、周知を進めていく。

学生面談（進路・就職：大学3年生、短大1年生中心）の実施

●要旨

卒業後の進路を共に考えることをモットーに、時期を設定して予約制の定期個別面談を実施している。卒業学年の大学 4 年次生、短大 2 年次生は 6 月から 7 月にかけて、また就活時期を迎える大学 3 年次生、短大 1 年次生は 7 月から 10 月にかけて行った。個別面談は学生自身の進路への考えやニーズを知ることが出来る重要な柱の一つとして位置付けており、学生一人一人と時間をかけて向き合うことを心掛けている。定期面談後も継続して個別対応を実施し、学生との信頼関係の構築を図り、希望進路にそった求人情報を紹介するなど引き続き卒業まで支援を行っている。この定期面談以外にも年間を通じて学生面談を随時実施している。また、2 年次（前年度）に実施したミュージッククリエーション専攻、ミュージックコミュニケーション専攻の面談についても、3 年次にフォローアップの面談を行った。

●成果及び達成度

・卒業・修了学年（大学 4 年・短大 2 年等）については 6 月から 7 月にかけて、就活開始学年（大学 3 年・短大 1 年）については 7・9・10 月に個別面談を行った。面談した人数は以下のとおり。

大学 4 年次生：8 名、短大 2 年次生：4 名

・就職活動中の学生へのフォローアップと活動していない学生との面談を行った。就活直前となる大学 3 年次生、短大 1 年次生の全体数に関する個別面談率は、大学 56%、短大 44%であり、今後の課題として面談の周知、誘導方法を検討する。人数は以下のとおり。

大学 3 年次生：104 名、短大 1 年次生：50 名

・ミュージッククリエーション専攻、ミュージックコミュニケーション専攻の 3 年次生に対し、前年度から引き続きフォローアップの面談を実施し、その段階での進路志望に基づき求人案件等の紹介を行った。

ミュージッククリエーション専攻生：16 名（100%）、ミュージックコミュニケーション専攻生：5 名（56%）

例年 10 月に実施していた第 1 回進路ガイダンスを 6 月に開催した。それに伴い個別面談も 7 月から開始し、夏休み期間に自己分析や企業研究を行うように指導を行った。また、一般企業就職系の講座、セミナーも「キャリア支援センター講座」に位置付けて複数回実施した結果、履歴書・エントリーシートの添削や面接練習・相談を希望する学生が多く来室した。個別面談以外の全体の進路相談来室数は大学で延べ 355 名（前年度 324 名）、短大 175 名（前年度 106 名）と増加した。熱心に就活を行う学生のリピート率が高いことが特徴と言える。また、卒業生の相談も 20 名を超えた。

●今後の展望

学生の進路希望を把握するツールの一つとして「進路調査カード」の提出を指導している。面談来室率に直接関係するため、ガイダンス時だけではなく、教員にも協力を求めて授業内外での告知や呼びかけを依頼した。今年度の提出率は大学 63%、短大 47%であったが、提出率を向上させるための周知方法を再検討する。また、「音楽で働く」を卒業後の目的としているミュージッククリエイション専攻、ミュージックコミュニケーション専攻の学生の就職活動を支援するため、スタッフで担当制を敷き、きめ細かいフォローにより志望業界とのマッチングを行う。また、スタッフの企業訪問による求人開拓や郵送による求人依頼も併せて実施し、企業等に対する本学の認知度を高める広報を展開する。

プロダクション（大音ラボ）運営

●要旨

学生の実践的な学びや経験の場として、また大学と社会を繋ぐものとして、ミュージッククリエイション専攻が主体となり、事業展開をした。この事業は、学生が将来音楽で働くための実践的な活動の場を提供することを主目的とし、働くことの一面を経験することで学生自身がキャリア形成への関心を深め、卒業後のイメージの具体化に寄与することも目的とした。プロジェクトとして、企業・機関からの依頼による音楽制作など収支バランスを考慮した事業展開を行った。

●成果及び達成度

2018 年度は学生の学外プロジェクトとして以下の 13 プロジェクトを実施した。参加した学生、卒業生の人数は以下のとおり（教員・学外業者等は除く）。

〔ミュージッククリエイション専攻プロジェクト〕＊音楽制作等

広島ブルース編曲（学生 5 名）・アイプロ X 第 2 期（学生 4 名）・アイプロ X 第 3 期（学生 12 名）・天平祭七夕祭り 2018（学生 22 名）・えんとつ町のプペル VR 作品（学生 1 名）・TV 番組「オガッタ!？」（学生 3 名）・アイプロ X 第 4 期（学生 3 名）・映画「108」劇伴曲制作/録音（学生 1 名、卒業生 12 名）・TV 番組「オガッタ!？」第 2 期（学生 3 名）・アニメ「マナリアフレンズ」劇伴制作（学生 8 名）・マロニエファッショングランプリ 2019（学生 13 名）・オガッタライブ出演（学生 3 名）・キャプテンハーロック組曲浄書（学生 9 名）

上記以外にもミュージッククリエイション専攻では、「Demo 送付支援」として学生が制作した音源を学外プロダクション等へ送付する事業も実施。学生 1 人 10 社への送付を課し、約 440 通を送付し、数社からの反応が直接学生にあった。

〔著作権管理の枠組み構築〕

榎日音と著作権管理代行についての契約を締結し、学生作家の楽曲を JASRAC 等へ登録する枠組みを構築した。

●今後の展望

学生の音楽制作の実践的な場となる学外プロジェクトについて 2019 年度は、2018 年度と同規模で継続し、卒業生の加わる 2020 年度以降は拡大を検討していく。また、録音スタジオを中心にスタジオミュージシャン育成プロジェクトも継続して実施し、演奏員を中心とした卒業生のミュージシャン育成にも寄与する。今後もクリエイション専攻の教員・助手とキャリア支援センターの連携をいっそう密にして事業展開を行う予定である。

【2】国際交流

2018 年度は以下の 2 名が海外提携校留学助成金制度の適用を受け、ドイツの提携校で学んだ。

- ・大学 4 年 管楽器（フルート） フォルクヴァング芸術大学
- ・大学 2 年 弦楽器（ヴァイオリン演奏家特別コース） フォルクヴァング芸術大学

また、本学学生の送り出しに対し、同じ提携校から以下の留学生1名を受け入れた。

・ Folk Vanguard 芸術大学 大学声楽専攻

なお、今年度はフランスのブローニュ＝ビヤンクール地方音楽院との提携を終了し、新たにイタリアのミラノ・ヴェルディ音楽院との提携を締結した。この結果、提携校は韓国、中国、ドイツ、イギリス、イタリア、アメリカの計8校の大学・音楽院となった。

【3】 学生生活支援・福利厚生

月曜日から木曜日の週4日間はインテーカーが学生相談室に常駐し、学習や対人関係、家庭、就職にかかわることがら等、学生一人では克服が困難な問題の相談に応じている。また、この相談室では基本的に学生の自立を促す指導を行っているが、自立に至る途上にある利用者にとっては学内で落ち着きを取り戻す場所として重要な役割を果たしている。2018年度の来室者は延べ1,018名であった。

経済支援の面では本学独自の奨学金制度である「大阪音学大学奨学事業財団奨学金」の2018年度の貸与者は大学24名、大学院1名、短大4名、短大専攻科1名であった。利用者は前年度との比較では若干増加しているが、国の奨学金の要件緩和や本学における新たな奨学制度の創出等もあり、長期的に見た場合は減少傾向にある。

学習支援室の運営

●要旨

2017年度より作曲資料室内に「学習支援室」を開設し、同専攻の非常勤助手2名が音楽理論、ソルフェージュの個別指導を行っている。2018年度の利用者は開設年度の66名から48名に減少したが、継続的にこの制度を利用する学生が多く、指導に多くの時間が費やされることになった。

●成果及び達成度

学習支援室が学生間で広く認知され、本学の教育活動の中で一定の役割を担うことになった。

●今後の展望

2017年度同様、GPAが中程度の学生が利用している事例が多いことがIR委員会によるデータ分析で明らかになった。本来支援が必要な学生は科目担当の教員が個別に指導している事例もあり、今後、学生の自発的な利用を一層促す必要がある。

大学祭開催・自治会活動に対する支援について

●要旨

前年度に続きミュージックコミュニケーション専攻の学生が中心となって実行委員会を組織し、行事予定表の日程を1日に短縮して第2キャンパスで大学祭を実施した。また、学生自治会の下にリコーダーアンサンブル同好会、ボランティア同好会が新たに発足した。しかしながら、学生相互の親交、交流を図ることを目的として自治会の運営にかかわろうとする学生は少なく、会計処理等において大学の助言や指導が続いている。

●成果及び達成度

大学祭ではミレニアムホール、K号館にそれぞれ会場を設け、学生有志による演奏、外部ゲストによるバンド演奏やお笑いライブを交互に公開することとなった。また、「憩いの広場」への模擬店の出店は4件であった。通常の自治会活動においては、学生の自主演奏会が活発化していることから、自治会の予算より助成金を支出する機会が増えている。

●今後の展望

大学祭の終了後、経費節減の目的もあり、今後は外部ゲストの招聘をできる限り控え、在学生主体のイベントとすることを申し合わせた。また、地元のライオンズクラブからの要請により、在学生の同好会として「レオクラブ」が発足し、次年度より音楽を中心とするボランティア活動を展開する予定となっている。

【4】教員の研究活動

『大阪音楽大学研究紀要第五十七号』（論文1編、報告1編を収録）は、3月末にホームページ上に公開した。研究委員会は11回開催された。主な審議事項は、研究出張の助成対象、研究倫理教育の実施方法、研究活動に関わる規程の改定、研究助成についてであった。また、助成申請に対する審査、『大阪音楽大学研究紀要』の投稿論文等の査読と掲載可否の決定の他、図書館の購入資料の選定を行った。

FD推進

●要旨

2018年度活動案に従い、授業見学、アクティブ・ラーニングの研究、授業改善計画書作成（自己点検・評価統括委員会との連携活動）について議論を重ねた。また、9月13日と2月27日に外部講師を招聘したFD研修会を行った。

●成果及び達成度

シラバスに、各授業科目とディプロマポリシーとの関連や、準備学習について記載することで、より充実したものになった。授業見学は昨年より実施件数が増え、各教員への周知が広がりつつある。アクティブ・ラーニングの研究については、外部講師によるFD研修会で実践例が示された。

●今後の展望

FD研修会は、これまでより参加者が増加したが、今後非常勤教員も含め、さらに多くの教員の参加を促したい。

【5】自己点検・評価体制

自己点検・評価統括委員会を11回開催し、「学生による授業評価アンケート」における設問項目の検討、大学及び短大の自己点検評価書（2015 - 2017年度）の作成、学生満足度調査の集計結果の分析、大学院の3つのポリシーの改定原案の策定等を行った。

また、教育課程別の自己点検・評価委員会を兼ねる大学・短大の各運営会議、大学専攻科及び短大専攻科の各運営委員会、並びに大学院運営委員会において、前期・後期とも自己点検・評価に関する議題を扱い、自己点検・評価体制の実質化を推進した。

学生による授業評価アンケート

●要旨

自己点検・評価活動の一環として、「学生による授業評価アンケート」を行った。「個人指導による音楽実技」（レッスン）科目は後期において、それ以外の科目（リレー式授業等による一部科目を除く）は前期及び後期において、いずれも無記名式のアンケート用紙により実施した。回収したアンケートは、教育課程別・科目分野別・科目別等に集計し、各授業担当教員に集計結果及び自由記述意見欄の記載内容を返却した。

●成果及び達成度

大学及び短大の全教育課程を総合したレッスン科目のアンケート回答率は74.75%、それ以外の演習・講義科目等

のアンケート回答率は 76.96%であり、何れも昨年度の実績を上回った。

昨年度に引き続き、1 単位あたり 45 時間の学修を標準とする単位制度の実質化を推進するため、「予習や復習など、この授業のために費やした 1 週間あたりの平均的な学習時間」及び「宿題の実施、書籍・プリントを読む、楽曲の練習・聴取、発表の準備など、教員から授業外の学習について指示があった。」を中心的な設問項目とした。

●今後の展望

アンケートの周知を徹底するとともに、過去のアンケート項目との整合性を踏まえた上で、学生の能動的な学修行動に係る設問のあり方を検討する。また、同アンケートを継続してデータを蓄積し、教育改善に向けた議論の基礎資料として自己点検・評価統括委員会や大学・短大の運営会議等において活用する。

自己点検評価書

●要旨

「自己点検・評価組織規程」において 7 年間に 2 回、全学的な自己点検評価書の作成が規定されていることに基づき、2015 - 2017 の 3 ヶ年度に関する同評価書を作成した。この評価書は、本学が加盟する公益財団法人 日本高等教育評価機構の評価基準に準拠する形で、経営・管理・財務に関する項目は理事会が、それ以外の項目については自己点検・評価統括委員会が中心となり執筆・編集した。

●成果及び達成度

作成した自己点検評価書に基づき、自己点検・評価統括委員会において各項目を検討した結果、大学・短大とも日本高等教育評価機構の評価基準を満たしているが、主に以下の事項について一層の進展を図る必要があるとの結論になった。

- 1) FD 活動を充実させ、また効果的な教授方法に関する研究を行うこと。
- 2) 学生の入学から卒業までの学習や学習支援の状況等を把握するエンrollment・マネジメントの導入を視野に入れた教育目標達成度の点検・評価のためのシステム構築を推進すること。
- 3) 上記 2 と関連して、自己点検・評価統括委員会と IR 委員会とが連携し、データに基づく学修成果の可視化を通じて、教育の内部質保証に係るアセスメントポリシー（学修成果の評価方針）を確立させること。

●今後の展望

本学は大学・短大とも 2021 年度に認証評価を受審する予定である。これに向けて、教育の内部質保証の観点から、学修成果の把握・測定・可視化を一層推進する必要がある。2019 年度の大学音楽学部及び短大音楽科の入学から、学習過程の記録の一環としてポータルシステム上でのレッスンカルテの作成が開始されるが、これに加えて各学生の卒業時におけるディプロマ・ポリシーの達成度を説明するディプロマ・サプリメント（学位に関する補足的文書）等の導入により、学修成果をよりの確に把握できる仕組みを構築する必要がある。

授業改善計画書

●要旨

2017 年度後期の「学生による授業評価アンケート」の集計結果をもとに、専任教員が担当する全科目(リレー授業等の一部科目を除く)及び一部の非常勤教員が担当する科目について授業改善計画書を作成した。これら個別の授業改善計画書は講義・演習科目については教育課程別に、レッスン科目については教員別にまとめて CD-R に集成し、同計画書を執筆した全教員に配付した。

●成果及び達成度

授業改善計画書の主要な目的の一つは、各教員が授業の内容と実施方法を着実に振り返ることにより、改善への「気づき」をもたらすことである。また、同計画書を CD-R として集成し、各教員に配付したことにより、キワー

ド検索を通じて、一人の教員の「気づき」を他教員が参照しやすくなり、本学全体の教育の質向上に役立つことが期待される。

●今後の展望

集成した授業改善計画書は、「学生による授業評価アンケート」に対するフィードバックとして、学生及び教職員が自由に閲覧できるように、附属図書館、学生支援センター、教職員集会室等に配備する予定である。今年度における CD-R での配付に加えて、次年度は学生の学習促進に効果のあった有用な事例を紹介する小冊子を作成し、全教員が積極的に活用できるよう学内メールボックスを通じて配付する計画である。

【6】音楽メディアセンター 附属図書館

将来の蔵書構成に関して、E号館の書庫に収蔵する資料の半数以上を除籍することが既に2017年度中に審議、決裁されており、2018年度は実際にそれらの資料を処分することとなった。しかしながら、処分されずに残る資料を新校舎の図書館に収蔵する場合、書架やスペースが明らかに不足するため、1階の閉架書庫に集密書架を増設することが2019年度の特別事業として認められた。また、この増設に対して公益財団法人田嶋記念大学図書館振興財団より補助金が交付されることが年度末に確定した。

災害や気象の面では、6月18日に発生した大阪北部地震の影響により多数の資料が書架より落下し、整理作業のため翌日の13時まで臨時閉館とした。資料の破損は視聴覚関連が数点であった。また、夏期における書庫内の湿度上昇への対策として、新たに導入した大型除湿器等を終日稼働させることにより資料保全に支障が出ない程度に湿度を抑えることができた。

データの遡及においては、過年度に図書館業務を手作業からCALISへのシステム化を行った際、図書原簿とシステム上のデータの間には差異が生じていたことが2018年度になって明らかになった。この差異を解消するため、原簿とデータの突合及び修正作業を継続的に行った。

これらの活動を経て、2018年度中に新規に受け入れた資料を含め、2019年3月31日現在の資料数は図書・楽譜を合わせて約112,000点、視聴覚資料が約54,000点となった。

【7】音楽メディアセンター 楽器資料館

2017年4月の校舎移転と音楽メディアセンターへの改組から2年目を迎えた。

一般公開と「学芸員による展示解説」においては、楽器資料館の Web サイトから、または電話での事前予約制が定着してきた。これに伴い多客時の展示室混雑が回避でき、来館者の安全確保にもつながった。

当初、有料化により一般客の減少を懸念したが、むしろ観覧、解説など知的体験を楽しむ層が増加してきている。一般来館者（有料）のうち、展示解説参加者（観覧料と別途500円徴収）の割合が増加した。その割合は2017年度は22.7%、2018年度は33.3%であった。

情報発信の面においては、同館 Web サイトの更新、情報発信を推進した結果、新聞社の取材・記事掲出が2018年度で4件あった（毎日新聞夕刊2件、日本経済新聞1件、朝日中高生新聞1件）。

3つに区切った展示室において、展示コンセプトを明確にすることにより、楽器資料館の特徴を発信することができた。また、新しい文献情報や研究成果情報を反映することを目標に、旧来の展示キャプション、スポット解説の順次改訂を開始した。

2018年度の館内授業は、鍵盤楽器（チェンバロ等）、フォルテピアノ（古典ピアノ）を中心とした授業が増え、学生が「オリジナル楽器の演奏を体験する授業」として確立してきた。また、オリジナル・サクソフォーンの授業

貸出も開始した。

連携催事としては、楽器資料館が加盟する「かんさい・大学ミュージアム連携（全 18 館）」を通じて館相互の交流を深めた。かんさい・大学ミュージアム連携事務局をとおして提出した企画案が「平成 30 年度文化庁 地域を核とした美術館・歴史博物館支援事業」で採択され、大阪芸術大学博物館、関西大学博物館との 3 館の連携講座『伝達』を 2018 年 10 月 27 日にミレニアムホールで開催した。また、豊中市民対象の大阪音楽大学市民開放デー『インドの伝統楽器・シタール演奏とミュージアムトーク』を、連携支援センターと協同開催した。楽器資料館観覧に伴うミュージアムトークでは「世界の弦楽器—弦楽器の変遷と伝播」と題してレクチャーを行った。

保安・防災の面では、スタッフ全員による防災・避難訓練を行い、避難誘導灯、消火器の不足などを担当部署に報告し、改善した。多人数の来館時には、安全対策の確認作業を実施し、スタッフ配置の確認を行っている。また、車いすの点検も随時行っている。来館予定者リストや授業時、団体来館時の入館者数などを関連部署に周知し、災害時対応、校舎内のセキュリティー強化に努めている。

空調管理は、新しい施設であるため、年間を通して展示室及び収蔵庫の温湿度データを記録（24 時間・5 分単位）し、精緻なデータ集積を開始した。気候の変わり目の調整を円滑に行うため、技術者へのヒアリングを実施している。

図書館との重複資料については、OPAC 検索時に楽器資料館所蔵資料（禁帯出）が同時に表示される混乱を回避することを目的に重複チェックを開始した。旧音楽文化史研究室の資料は、関西洋楽史資料と「永井文庫」、「戦前に出版された楽譜のコレクション」の所蔵状況を明確にする作業を開始した。所蔵の「二世鶴沢清八浄瑠璃本コレクション（約 1600 点）」のデータベースを、図書・視聴覚資料に組み入れる作業に着手した。

校史資料の収集として、創立 100 周年翌年の 2016 年度分より、可能な限り電子データ収集に切り替えた。また、各事務部門に校史関係の収集対象資料の精査を依頼し、これに基づく資料収集を開始した。

学外団体への資料提供としては、ピリオド楽器演奏団体の演奏会に貸出し、テレビのクイズ番組に楽器の画像を提供した。

「楽器資料館展示ケース内照明器具取替え」

●要旨

移転後の展示室では、天井照明、スポットライトを LED 化した結果、「明るく見やすい展示」が具現できた。現在、照明器具付き展示ケース 57 台（大半が製作後 20 年以上経過）を継続使用している。現在、ケース内上部の照明器具は、旧来の蛍光灯と紫外線防止型などの特殊蛍光管を使用しているが、今後、入手困難が見込まれる。LED 照明器具に取替えることにより、観覧しやすい環境整備、展示品の保全、節電を目的とする。LED 型への取替えの利点は次のとおりである。①消費電力が少ない。②器具の寿命が長い。③発熱リスクが少ない。④展示資料に有害な紫外線発生がほぼない。⑤今後、器具等の入手困難を回避できる。

●成果及び達成度

「見やすい展示」を目的に、各地の博物館・美術館を参考にして、展示ケースの照明を LED に交換した。演色性を重視し、蛍光灯の光色を精査した結果、目に優しく、かつ楽器の細部や装飾が見やすくなった。殊に、「江戸期の箏」の象嵌、螺鈿、蒔絵など精緻な装飾が克明に鑑賞できるようになったため、国内外の観覧者の満足度が増加したと思われる。

●今後の展望

当該計画は 3 年計画とし、1 年目（2018 年度）は展示室 1 と 2 の 17 ケース、2 年目は展示室 3 の 34 ケースを対象とする。3 年目は横長型展示ケース（サントリーコレクションなどの 6 ケース）の器具交換を実施する。

【8】 付属音楽幼稚園

在園児は5月1日付で298名(3歳児3クラス97名、4歳児3クラス99名、5歳児3クラス102名、前年度比1%減)3月には100名が卒園した。2歳児親子教室「りんごクラブ」は35組募集のところ、前期(5月～9月)は64組、後期(11月～2月)は51組の申込があり、昨年度同様クラスを増設した。子育て支援の一環として、1歳児の親子を対象に「きらり」を月1回程度実施しており、今年度の参加者は延べ492名であった。2歳児の親子を対象にした「ようちえんであそぼ」も年間8回実施しており、今年度の参加者は延べ218名、2019年度の入園者の44%が「ようちえんであそぼ」の参加者であった。音楽教室「クレフ」(希望者対象の課外レッスン、ピアノ・ヴァイオリン・マリンバの3種)は受講者が5月1日付で114名、対象園児の57%が受講した(前年度比5%減)。

園庭の芝生修復

●要旨

「広い芝生の園庭で裸足で遊べる幼稚園」は府内でも希少で、入園希望者の当園選考の重要な要素になっており、保護者や見学者にも好印象を与えている。園庭の傷んだ芝生を修復するため、2018年5月に「エアレーション(硬くなった土壌に穴を開け、空気を送り込むこと)を行い、芝生の修復を図った。

●成果及び達成度

芝生の修復について期待していた効果が得られず、ひとまず現状維持の状況となった。

●今後の展望

芝生は本園の大きなアピールポイントでもある。雑草の除去や施肥等の継続的なメンテナンスの実施が必要であるため、今後も継続して維持管理を行っていく。

幼稚園・保健室の改修

●要旨

老朽化した保健室のスペースを改修し、実用的で衛生的な保健室にする。

●成果及び達成度

夏季休業中に改修を行った。園児の急な体調変化にも万全に対応できる清潔な保健室に生まれ変わった。

●今後の展望

園児の体調不良の際に、保健室の設備を使用することで園内に疾病の流行がないよう万全の対応をとる。同時に保健室の清潔を保ち、充分活用していく。

B 社会連携活動事業

【1】 アドミッション事業

オープンキャンパスや体験レッスン、セミナー、フェスティバルなど各種イベントを年間を通じ開催した。より多くの人に本学への関心度、志願度を高めてもらうべく、DMや高校訪問活動を展開し、これらのイベントの参加者増加を図った。

体験イベントの実施

●要旨

オープンキャンパスを年間3回、専攻・コースごとに公開授業や在学生の演奏などを実施した。また、無料体験レ

ッスンイベント「トライアルレッスン」を開催した（4月22日、6月3日、12月2日）。

●成果及び達成度

オープンキャンパスや体験レッスンイベントを通し、本学教員と志願者層が接触機会を設け、教育方針を伝えるとともに実技指導を行った。

●今後の展望

教員・在学生と志願者層が対話できる機会を設け、イベント実施へ内容や方法を充実させていく。

インターネット出願導入

●要旨

2019年度大学・短大推薦入試及び一般入試A・B両日程で、これまでの専用紙での出願に加え、Webでの入学試験出願登録手続きを可能とした。

出願者は必要事項をネット上で登録した上で、指定書類を出力、他の必要書類と共に郵送する形をとった。

●成果及び達成度

志願者の利便性が向上し、本学における受付処理が迅速化した。

●今後の展望

周知活動を強化し、利用者数の拡大を図っていく。また、認定テストなど本システムの利用機会を増やすことも検討していく。

ピアノ指導者・生徒対象セミナーの開催

●要旨

ピアノに取り組む、中・高校生及びその指導者と本学との関係を構築するため、ピアノ関連テーマのセミナーを開催し、併せて教員との懇親会を行った。

●成果及び達成度

2018年度は7月に田村響特任講師、1月に仲道郁代特任教授をゲストに迎えトークセッション、公開レッスン、懇親会を実施し、多くの参加者があった。

●今後の展望

2019年度においても2回のセミナーの開催を予定している。中・高校生への直接的なアプローチの機会を増やす。また、中・高校生が指導者とともに参加しやすく、実践的かつ本学の教育、環境等を深く理解できる場とする。

軽音楽フェスティバルの開催

●要旨

ポピュラー・コースの認知度向上を目的とし、軽音楽フェスティバルを開催し、高校生バンドのコンテスト、本学在学生によるライブ、クリニック等を行った。

●成果及び達成度

8月にポピュラー・ミュージック・フェスティバルを開催し、延べ730名の来場者があり、ポピュラー・コースの認知度向上に寄与した。

●今後の展望

近畿各府県の軽音楽連盟、高校教員との連携を強化し、更なる動員とイベントの質の向上を図る。

吹奏楽フェスティバルの開催

●要旨

6月に中学・高校の吹奏楽部員を対象に、本学学生による吹奏楽コンクール課題曲の演奏や本学教員による楽曲分析講座などを実施した。木管、金管、打楽器のセクション別講習会も昨年に引き続き行った。また、選抜学生コンサート、ポピュラーミニライブなど、吹奏楽以外の催しも実施した。

●成果及び達成度

1,000名を超える中・高校生に対し、本学学生の演奏や教員の指導を通して、本学の魅力を伝える機会とした。

●今後の展望

来場者のニーズに応えるため、各イベントの更なる充実を図る。また、本学の教員、施設、学生を知ってもらう機会として捉え、本学に対する興味喚起を促す。さらに、本イベントの広報活動を強化し、参加校数の増加を目指す。

専任職員による高校訪問広報活動プロジェクト

●要旨

専任職員による高校訪問活動を過年度より引き続き実施。「ミュージッククリエイション専攻」と「ミュージックコミュニケーション専攻」の案内に加え、音楽系クラブ特別推薦の認知度を高めることを目的とした。

●成果及び達成度

6月に全専任職員が分担し、昨年度より40校多い近畿圏約170校を訪問した。「ミュージッククリエイション専攻」と「ミュージックコミュニケーション専攻」2専攻について生徒への周知の依頼を行った。また、クラブ顧問に対し、該当する分野のクラブ特別推薦制度の案内を実施した。

●今後の展望

高校への広報活動としての意義に加え、専任職員の学生募集に対する意識向上を図り、全学的な広報力強化を図る。

オープンキャンパスの開催

●要旨

オープンキャンパスを春(4月)・夏(7月)・秋(10月)の3回開催した。専攻・コース別体験授業、カリキュラム・入試課題解説、個別相談のほか、在学生による演奏、在学生との交流会、施設見学ツアーなども行った。

●成果及び達成度

教員・在学生による各専攻・コースの案内、個別相談会による入試制度等説明により、参加者個々の理解が深まった。

●今後の展望

在学生がより主体的に運営に携わり、参加者の中・高校生との一体感が生まれるイベントとしていく。

高大連携事業「ポピュラー・コース オープンカレッジ」

●要旨

高大連携の提携校である帝塚山学院高校の生徒を主として、ポピュラー音楽に関心のある高校生を対象に、年間16回のポピュラー音楽講座を開講した。提携校に対しては本講座受講を条件とした「高大連携特別推薦入試」を実施している。

●成果及び達成度

ヴォーカルアンサンブル等、演習系授業を増やして実施した。また、帝塚山学院高校以外の生徒にも積極的に周

知し、受講生を募った。高校生にとって、大学での学習を体験する貴重な機会となっている。本制度を活用した「推薦入試（高大連携特別推薦）」では3名の適用、出願があった。

●今後の展望

帝塚山学院高校には、2019年度も年間16回の講座を継続して実施する予定である。2020年度に改編予定のコースの特色を反映し、ステージパフォーマンスや楽曲制作の講座も開講する。

【2】対社会事業

<キャリア関連>

●2018年度進路調査結果（2019年3月卒業生、2018年9月卒業生含む）

区分		大学	短大	大学院	音楽専攻科	短大専攻科
就職	音楽教室（企業）	12	8	2	4	2
	音楽教室（自営）	4	2	1	1	0
	演奏活動	1	8	1	0	1
	企業	42	18	1	4	2
	教員	26	2	5	8	2
	公務員	2	0	0	1	0
	その他	14	11	1	4	0
	小計	101	49	11	22	7
進学		36	27	0	0	0
その他	アルバイトしながら演奏活動	1	14	0	1	0
	その他（進学・就職準備等）	13	9	0	1	2
	小計	14	23	0	2	2
卒業・修了者数		151	99	11	24	9

<エクステンション関連>

エクステンション関連事業として教員免許状更新講習を夏期間（8月）に8講座実施し、受講者は455名であった（人数は延べ数）。

<連携関連>

連携支援センターでは、大学の教育研究活動の一端を地域社会に還元することを目的として、地方自治体・公共団体・自治会・公民館・ボランティア団体・一般企業等さまざまな分野の団体と連携を結び社会貢献活動を実施している。当センターの連携関係事業は、大きく分けて社会学連携事業、公開講座、依頼演奏に分類することができる。

・地域社会との連携

①豊中市との共催で「とよなか音楽月間」「ミュージカル公演」「市民ロビーゆうゆうコンサート」「第4回豊中音楽コンクール」等の実施、豊中中央ライオンズクラブの運営資金援助により「市立豊中病院ランチタイムコンサート」を開催した。また、今回で10回目となる、大阪大学・大阪音楽大学ジョイント企画「からだの音楽、音楽

のからだ」の公演を大阪大学・大阪音楽大学・豊中市の三者共催事業として実施した。豊中中央ライオンズクラブ及び豊中市、豊中市教育委員会との共催で「豊中こども音楽フェスティバル」を計画していたが、台風のため中止となった。

②豊中市野田校区社会福祉委員会の依頼により、本学の学生サロン「ばうぜ」を会場として「いきいきサロン」の催事名称で地域の高齢者の憩いの場を提供するとともに、本学の在学学生によるコンサートも開催した。

③寝屋川市との包括連携協定により、市主催事業の「アルカスピアノコンクール」へ審査員の紹介を行った。

④公益財団法人川西市文化・スポーツ振興財団との連携により、川西市吹奏楽連盟主催の吹奏楽楽器別講習会を本学学生を講師として実施した。

・公開講座

豊中市、高槻市、羽曳野市、NPO 法人大阪府高齢者大学校等、自治体・公共団体と連携協力して提携講座の実施や講師派遣等を行った。

①豊中市：中央公民館との共催による大学開放講座「音楽・心の旅」

②高槻市：けやきの森市民大学 大阪音楽大学公開講座「音楽の宝石箱」

③羽曳野市：はびきの市民大学 講座への講師紹介

④大阪府高齢者大学校：講座への講師派遣やコンサートの実施

・依頼演奏

地方自治体、公共団体、公益法人、ボランティア団体、学校、企業及び個人等から多数の演奏依頼を受け、一定の演奏水準を保ちつつ卒業生支援の一環として、演奏者の手配・派遣・紹介等のマネジメント業務を行っている。これは卒業生の活躍の場を確保するとともに大学の広報活動の一翼を担った事業でもある。また近年は、在学学生でも特に優秀な個人やグループに演奏を依頼し、実地研修の場として活用している。

教員免許状更新講習事務室の運営

●要旨

対社会貢献の一端及び教員養成課程を有し、教員を輩出している大学の責務として、教員免許状更新講習を実施した。音楽系講習は全国的に少なく、特に関西圏において中心的役割を果たしており、社会の要請に応えるものとなっている。受講時間は、「必修領域」6時間以上、「選択必修領域」6時間以上、「選択領域」18時間以上で合計30時間以上の受講が必要となるが、2018年度から本学では「選択領域」のみを実施している。この講習は、免許状の修了確認期限満了前の2年間で履修するもので、今年度期限を迎える人や卒業生を優先する方針を取っており、学校教員が受講しやすい8月に実施している。

●成果及び達成度

2018年度の延べ受講者数は455名で、講習ごとの受講者数は以下のとおりである。

	受講者数／申込者数	(定員)
・雅楽基礎講座	28名／63名	(20名)
・打楽器指導法①	48名／99名	(30名)
・打楽器指導法②	39名／88名	(30名)
・日本伝統音楽	56名／94名	(45名)
・合唱指導法①	113名／129名	(65名)
・合唱指導法②	109名／122名	(65名)
・リコーダー指導法	37名／171名	(30名)
・指揮法の基本と実践	25名／132名	(20名)

全ての講習において定員を大きく上回る申込みがあったため、担当講師に受入枠の拡大を依頼し、可能な限り受入れを行った。また講習後に実施した受講者に対する評価アンケート結果は、4段階中、最高評価の「4.よい」が81.7%、「3.だいたいよい」が17.4%と満足度が高い講習だったと思われる。

●今後の展望

2019年度は、特に抽選漏れの多かった「リコーダー指導法」を2日間開催し、音楽教員の受入れ機関としてのニーズに応じていく。本学は今後、音楽科目に特化した選択領域科目のみを開講し、教職科目の必修領域は開講しないことを決定している。

DAION 座ワークショップ

●要旨

DAION 座の座員及びパートナー俳優（2019年1月より全員エントリー俳優として所属）が中心となり、外部団体から依頼のある「ワークショップ」や「コンサート」を実施する。広く DAION 座の存在を周知し、将来、大阪発の創作ミュージカルを上演する際には、芸術面だけでなく、経済的な成功にも収支均衡を目指し、本学の名声を高めることに繋げる。上演に向けて講師を招き、エントリー俳優らの技術を高めるためのレッスンを有償で行い、運営費の一部に充当する等効率的な事業展開を行っている。

●成果及び達成度

2018年度は主に草津クレアホール・アートセンター事業（宿場まつり前日祭（4月28日）、草津文化振興フォーラム（5月13日））への草津歌劇団の出演に際しての指導と草津歌劇団オリジナルミュージカル「リトル★オズ」公演に向けての指導を中心に行った。これまで様々なミュージカル、コンサート、ショー、ワークショップを行い出演依頼も増えてきた為、さらにクオリティをあげ、活動展開していくために出演できる人を募るオーディションを5月19日に実施。受験者10名の中から、6名のレッスン生を新たに迎えた。事業等の詳細は以下のとおり。

□草津クレアホール・アートセンター事業への参画に伴う指導

- ・宿場まつり前日祭り 4月6回
- ・草津文化振興フォーラム 5月3回

□草津歌劇団オリジナルミュージカル「リトル★オズ」の指導・出演

6月5回、7月4回、8月4回、9月5回、10月8回、11月8回 合計34回

□レッスン

エントリー俳優らの技術を高めるため、講師を招きほぼ毎月実施した。

●今後の展望

2019年度は自主公演の準備期間とし、長期に亘る公演協力は行わず、近い将来の DAION 座自主公演実現に向け、実績を積んでいく為に小規模な公演（200人～300人規模）を行う予定である。

Daion100周年記念倶楽部

●要旨

本学の卒業生で、吹奏楽の分野で活躍している中学・高校の教諭との交流を深めるため、Daion100周年記念倶楽部を学生サロン「ばうぜ」2階で開催した。本学の取り組みについて説明するとともに、本学に対する意見や要望を聴取した。

●成果及び達成度

本学が取り組んでいる音楽を通じた社会との連携・貢献・発信の新たな可能性が見出され、また本学の存在意義を社会にアピールすることができた。

●今後の展望

今後も Daion100 周年記念倶楽部を継続し、本学の卒業生と強固なネットワークを形成しながら、社会との連携を重視した大学運営に結び付ける。

サウンドスクール

●要旨

サウンドスクール事業は、豊中市との包括連携協定に基づき、豊中市教育委員会と連携して「音楽あふれる学校園づくり」をテーマに、2006 年から事業を展開している。豊中市立のこども園・小学校・中学校へ、授業支援、出張演奏、クラブ活動支援、伝統音楽の普及といった活動を年間延べ 75 件（こども園 13 件、小学校 44 件、中学校 18 件）実施し、延べ 762 名の学生（卒業生・教員・演奏員を含む）を教育現場へ派遣した。経費については、豊中市教育委員会とこども未来部よりそれぞれ予算化がなされた。

●成果及び達成度

昨年度に引き続き、吹奏楽・合唱の指導や授業支援演奏会など同等の内容で依頼を受け、多くの学生が経験を重ねることができ、小学生、中学生にも好評であった。豊中市内の小学校 41 校、中学校 18 校、合計 59 校のうち、サウンドスクール事業の実施校は 35 校あり、実施したすべての学校より、教育活動への効果について「役立った」、「次年度も本事業を実施したい」との報告を受けた。

●今後の展望

実施した学校からの肯定的な意見を未実施校へ伝え、実施校の拡大を図りたい。

とよなか音楽月間

●要旨

豊中市と連携して 10 月から 12 月中旬までの期間で様々な形態の演奏会等を開催した。また、100 周年記念館内にある楽器資料館（通常は有料）に、豊中市民の方を招待するイベント「市民開放デー」も音楽月間内に実施した。

●成果及び達成度

豊中市の政策である「音楽あふれるまち とよなか」が、市民はもちろんのこと、市外の方々にも定着しつつある。

●今後の展望

市民のニーズにあった演奏会を企画し、本学と豊中市のコラボならではの演奏会等を実施していきたい。

第 4 回豊中音楽コンクール

●要旨

豊中音楽コンクールは、2015 年度から豊中市の主催により、「次代を担う優れた演奏家を発掘・育成し、音楽文化の振興を図ることを目的」として設立されたクラシック音楽コンクールで、本学は共催団体として運営協力し、校内施設で 6 月 16 日・17 日に予選、7 月 1 日にザ・カレッジ・オペラハウスで本選を開催した。

部門は高校と大学・一般があり、それぞれにピアノ、声楽、管弦楽器の各部門を設け（高校の部は管楽器部門と弦楽器部門に分かれる）、定員は各 30 名、審査は本学教員と学外の著名な演奏家の方々に依頼して行われた。上位入賞者は、その年の秋にザ・カレッジ・オペラハウスで開催する「豊中音楽コンクール 受賞者記念コンサート」に出演することができる。また、高校声楽部門入賞者で条件を満たした者（1 名）は、大阪府高等学校音楽教育研究会より「瀧廉太郎記念 全日本高等学校声楽コンクール」の大阪府代表として推薦を受けられる。

●成果及び達成度

高校部門 106 名、大学・一般部門 134 名の多数の応募があった。コンクールビジネスが横行する中、真に実力を

問うコンクールとして着実に支持が増えている。また、本選では多数の一般来場者があり、華やかな審査会場の中で充実したコンクールとなった。

●今後の展望

同コンクールは、豊中市主催のもと、2019年6月15日・16日に予選、6月30日に本選を開催することが決定している。審査員は学外の著名な演奏家の方々にも依頼することができたため、全国に開かれた音楽コンクールとしてさらに発展できるものとする。

ミュージカル公演（市民協働）

●要旨

大学主催行事として年度末にミレニアムホールで開催していた短期大学部ミュージカル・コースの試演会を、2014年度第4回公演より豊中市との共催で開催している。2018年度で5回目の共催事業となり、3月9日・10日に、4回(1日2回公演)の本公演を開催した。会場は2016年度よりザ・カレッジ・オペラハウスとなっている。また、2017年度より、サウンドスクール事業の一環として、豊中市内の小学生に公演を提供しており、今年度は小学4・5年生を中心に、430名が鑑賞した。

●成果及び達成度

入場者数は、3月9日1回目の公演414名、2回目の公演344名、3月10日1回目の公演295名、2回目の公演374名(4公演計1,427名)であった。昨年度は「オズの魔法使い」をベースに羽鳥教授が脚本を執筆し、主人公が歩む道の中で、自身とどう向き合っていくかを描いていた作品であったが、今年度は、事故で両親をなくした主人公が病気の妹を救うために、時空を超えて「魂の水」を探す旅に出る冒険ファンタジーで、観客には大変好評であった。

チケットは全て「販売」するという羽鳥教授の指導方針により、売上全体の81.2%以上のチケットを学生自ら販売し、自分たちの舞台のチケットを観客に購入してもらうことの大切さも学ぶことのできた公演であった。今年度より、学生販売分の他、コンサート・センターでもチケットの取り扱いが可能になり、それに伴い、チケットの売り上げが全て大学に公演収入として計上され、制作費に充当することができた。小学生への公演提供については、「本物の舞台芸術に触れることができ、舞台へのあこがれも芽生えている」という感想を多数頂戴し、地域の子どもたちにとって良い刺激を与えることができた。

●今後の展望

2014年度より5回に渡り、豊中市と共催で公演を実施してきたが、今年度を以て終了し、2019年度より本学主催公演として、2020年2月23日・24日・25日にオペラハウスで公演の開催を予定している。日程、公演時間は調整が必要だが、昨今、プロの劇団等は平日昼公演開催を積極的に行い観客を動員していることもあり、同様の環境下で公演を行うことで、業界の流れを在学中より感じてもらい、卒業後に役立てることを目標とする。

Daion 吹奏楽フェスティバル 2018 ～吹奏楽の饗宴～

●要旨

管打専攻等の卒業生が指導している京阪神地区の有力中学校・高等学校の吹奏楽部を招待し、ザ・カレッジ・オペラハウスを会場として吹奏楽演奏会を開催した。

●成果及び達成度

招待した出演校の指導者(卒業生)だけでなく、観客として来場する卒業生も対象としたホームカミングデー的な催事となり、卒業生の本学への帰属意識を高めることができた。

●今後の展望

京阪神地区の中学校・高等学校を対象として演奏会の広報活動を行い、本学入学への契機となるよう工夫したい。

【3】オペラハウス事業

本格的なオペラ公演のできるホールとして建設されたザ・カレッジ・オペラハウスは、「新音楽、新歌劇ノ発生地タラン」という建学の精神に謳われている創立者の大志を実現すべく、これまで多数のオペラ公演を行い、関西、否、日本有数のオペラ発生地として、文化庁芸術祭において「芸術祭大賞」を3度受賞したのを始め、モービル音楽賞（現、JXTG音楽賞）の本賞や三菱UFJ信託音楽賞の本賞を受賞するなど、創立者の夢を着々と実現するとともに、社会からも高い評価を得てきた。

本学の創立100周年目に当たる2015年度に、「創立100周年記念オペラ」と銘打って、ヴェルディ唯一の喜劇作品と言っても良いオペラ「ファルスタッフ」を、例年より予算をかけて上演したことや、過年度から創立100周年以降のオペラハウスにおける主催オペラ公演の在り方を見直すという計画が理事会より発表されていたこともあり、2016年度は主催オペラ公演を休止し、2017年度以降の公演計画について検討する年とした。その結果2017年度からは、井原広樹、栗國淳、岩田達宗の3名の客員教授を年替わりで演出に起用し、3年にわたる「ディレクターズチョイス」シリーズとして主催オペラ公演を行うことを、理事会の承認を得て決定した。2017年度には井原広樹演出、牧村邦彦指揮でモーツァルトの《偽の女庭師》を上演、2018年度は栗國淳演出、森香織指揮でメノッティの《テレフォン》《泥棒とオールドミス》を上演した。

ザ・カレッジ・オペラハウスは、教育、研究の成果発表の場として、また学校法人として様々な催事の会場として広い用途に活用されている。例えば、大学主催演奏会として16公演を開催し、6,236名が入場した。また学生の自主公演として開催されている授業の延長にあるコンサート等を11公演開催し、3,324名が入場した。さらにクラシック系の専攻で学ぶ学生は、卒業実技試験の際、必ずこの舞台で演奏の機会を持つことになっており、2018年度は22回に及ぶ卒業・修了演奏が実施され、1,282名が入場した。その他にも、付属音楽幼稚園の公演が2回、同窓会《幸楽会》のコンサートが1回行われ、あわせて2,012名の入場者を得た。またオープンキャンパス、講座やセミナー、入学式、卒業式、共催事業など多岐にわたる事業が実施され、15件で6,360名の入場者があった。その結果、年間催事総数は67件、総入場者数は19,214名、総稼働日数は203日に及んだ。

付属のオペラハウス管弦楽団は、京阪神地域を中心に7件14回の依頼演奏を実施し、特に様々な団体のオペラ公演には欠かせない存在になっている。平成30年度には、文化庁「文化芸術による子供の育成事業（巡回公演事業）」を担い、岡山、広島、山口、島根、鳥取の5県で実施した巡回公演事業において、ワークショップや演奏会を計24回開催した。巡回公演の実施は、本学の名を広く中国地方にも知らしめる成果を収めている。

オペラハウス管弦楽団出張演奏

●要旨

外部団体から依頼を受けて、ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団が出張演奏を実施した。7公演14回の出張演奏を行った。

5月4日・5日 「近江の春 びわ湖クラシック音楽祭 2018」 かがり火オペラ「ディドとエネアス」

7月4日・6日・8日 東京バレエ団「白鳥の湖」

8月31日 大阪韓国文化院20周年記念演奏会

10月6日・7日 みつなかオペラ「トスカ」

11月17日・18日 2018年度 江原啓之プロデュースオペラ「夕鶴」

1月19日・20日 びわ湖ホール声楽アンサンブル オペラ「森は生きている」

2月9日・11日 びわ湖ホール声楽アンサンブル 第68回定期公演・東京公演 「バロック声楽作品の精華」

●成果及び達成度

依頼演奏は大学の広報活動の一端を担っている。また、2016年度から運営体制を一新し、循環型教育を取り入れたオーケストラとして楽団員の研修も行いながらプロの管弦楽団として活動している。その成果は徐々に表れてきている。出張公演の数も昨年度に比べ1.5倍に伸ばすことができた。今後もオペラ演奏の質の高さについて、依頼団体から得ている信頼を損なわないように向上に努め、関西のオペラ界に欠かせない存在となるよう努力する。

●今後の展望

昨今の経済状況等により、以前に比べて依頼件数が減少傾向にあるが、オペラ公演等において、演奏の質を一層高めることで、より多くの依頼演奏を受けられるよう努めたい。

文化庁巡回公演事業

●要旨

小学校・中学校において一流の文化芸術団体による巡回公演を行い、子供たちに優れた舞台芸術を鑑賞する機会を提供することにより、彼らの発想力やコミュニケーション能力の育成を図り、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力の向上につなげることを目的としている。学校法人大阪音楽大学では、自らが制作団体となり、公演団体をザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団として2010年度から実施し、2018年度は9年目となる。2018年度は、岡山、広島、山口、島根、鳥取の5県において、小学校7校、中学校4校、特別支援学校1校でワークショップと演奏会を実施した。

●成果及び達成度

本公演の実施にあたり、事前に公演に関するワークショップを行い、オーケストラの説明や楽器紹介・ミニコンサートなどを実施した。また、児童・生徒との共演の演目の実演指導を行い、本公演に向けて子供たちの関心を高めた。本公演では、オーケストラの演奏を鑑賞するだけでなく、床から伝わる音の振動など、体育館ならではの臨場感あふれる体験や、プロのオペラ歌手の歌声に触れる機会を設け、指揮者体験コーナーや共演コーナーではオーケストラと子供たちとのコラボレーションも実現した。

●今後の展望

2019年度は、富山県と京都府の1県1府において、10公演の実施が採択されており、富山県の2校と京丹後市の1校を除くと、例年よりも本学の近隣地域での実施が予定されている。また、中学校1校を除くと、他はすべて小学校が対象であり、近隣の低年齢層に生の音楽の魅力を伝えるとともに、本学の広報活動の一翼を担う公演としたい。

オペラハウス合唱団出張演奏

●要旨

外部団体等から依頼を受けて、ザ・カレッジ・オペラハウス合唱団が出張演奏を実施しているが、2018年度は、次の2公演の依頼を受けた。

11月29日 天皇陛下御即位30年奉祝記念コンサート

1月2日 関西フィルハーモニー管弦楽団ニューイヤーコンサート

●成果及び達成度

演奏上の条件の指定に適った出演者を確保し、成功裏に終えることができた。

●今後の展望

昨今の経済状況等により、以前に比べて依頼公演数が減少傾向にあるが、どのような種類の依頼公演であっても、

オペラハウス専属の合唱団としての演奏の実力を示すことで、より多くの依頼演奏を受けることができるよう努めたい。

オペラ公演

●要旨

制作者と演出家が綿密に協議して演目を決定し、限られた予算の中で最高のものを追求する「ディレクターズチョイス」シリーズの第2弾として、オペラブッフアの伝統を20世紀に引き継いだメノッティの傑作「テレフォン」と「泥棒とオールドミス」を上演した。

●成果及び達成度

栗國淳の演出は、オペラは音楽あつてのオペラであるという考えに立脚している。この2つのオペラにおいても、あくまで作曲家の残した音楽を大切に、かつ台本から大きく逸脱せず、鑑賞者の誰にとっても理解しやすい本道を行く演出であった。しかし同時に、そこには、1940年代のアメリカ社会が抱えていた様々な問題が、上質の笑いやその奥に潜むアイロニーにまぶされながら浮き彫りにされており、また、それらがスマホ依存や寂しさに苛まれがちな現代人の心の問題にも深く通じるテーマであることが強調されていた。大阪音楽大学の教員や卒業生などからなる歌手陣は、高い歌唱力とともに、磨かれた演技の力で栗國の意図を見事に実現する好演を見せ、会場の聴衆から大きな喝采を受けた。また、ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団も30年にわたって培ってきた演奏のノウハウを最高に生かした好演を展開し、上演の成功に大きく寄与した。「関西音楽新聞」2018年12月1日号や「音楽の友」2019年1月号、モストリー・クラシック2019年1月号でも、「歌唱も鮮やか、演技も自然で表情に富み、全体として極めてまとまりの良い成功作」など高い評価が示され、「2018年度音楽クリティッククラブ賞・本賞」を受賞することができた。

●今後の展望

ザ・カレッジ・オペラハウスは、これまでもなかなか上演されにくい20世紀オペラなど、興行的には極めて厳しい条件下にあるものを多数上演し、高い評価を得てきたが、いつも集客には非常に苦労してきた。今回のメノッティの2作品は、コミカルな筋運びを含む作品であり、オペラ鑑賞に馴染みの少ない観客でも気軽に楽しめる作品であったが、知名度の低さ、しかも20世紀作品ということで集客に苦労し、初日（11月2日）の集客率が約77%、2日目（11月4日）が約79%であった。今後、こうした知名度の低い作品の上演では、いかに周知し、集客につなげるかについて研究を重ねる必要があるが、今後も隠れた名作を掘り起し、紹介に努めていきたい。

●公的助成・民間助成について

本公演実施にあたり、次の団体より助成金を得た。

- ・独立行政法人 日本芸術文化振興会
- ・公益財団法人 アサヒグループ芸術文化財団
- ・公益財団法人 ロームミュージックファンデーション
- ・公益財団法人 三菱UFJ信託芸術文化財団
- ・公益財団法人 朝日新聞文化財団

常翔学園との連携協力

●要旨

学校法人常翔学園との連携協力に関する協定に基づき、常翔学園が2017年4月、梅田キャンパス（OITタワー）に開設した常翔ホール（576席）や1階ロビーにおいて、音楽の生演奏の提供を開始した。梅田の中心地において本学の存在感をアピールできるメリットを活用すると同時に、地元茶屋町との地域連携を進める常翔学園に対し、

質の高い音楽を提供することで支援し、今後、両法人が良好な関係を保ちつつ連携協力を深めるための先駆けとなる活動を行っている。

●成果及び達成度

2017年9月14日の「常翔学園・大阪音楽大学 連携協定記念プロジェクト 常翔&大音コラボレーション@茶屋町 ビッグバンドライブ 音楽と映像の饗宴」を皮切りに、2018年度は以下の4公演を実施した。

10月18日 ストリング・コンサート（学生自主公演）

11月10日 ホルン・アンサンブル・コンサート（学生自主公演）

11月16日 邦楽演奏会（大学主催）

2019年2月14日 ジャズ・コンサート（大学主催）

大学主催の2公演には668名が来場し、盛況となった。また、毎月第2土曜日にOITタワー1階ロビーにおいて常翔ロビーコンサートを実施している。本学学生による約1時間の演奏は、毎回好評を博している。

●今後の展望

2019年度は次の演奏会を常翔ホールで実施する。

11月15日 邦楽演奏会

2020年2月13日 大学・短大 ジャズ・コンサート

3月2日 ザ・ストリング・コンサート

また、OITタワー1階ロビーの常翔ロビーコンサートも毎月1回の開催が決定している。これらを通じて今後も質の高い音楽を提供し、両法人の発展に寄与したい。

クラシック・ジャム・カルテット コンサート

●要旨

ファブリス・モレッティ、オリヴィエ・ドゥフェイ、フィリップ・シャーニュ（以上サクソフォーン）、ジャン＝マルク・ヴォルタ（バス・クラリネット）の4名からなる「クラシック・ジャム・カルテット コンサート」を実施した。

●成果及び達成度

2018年10月26日ミレニアムホールにて1名のバス・クラリネット奏者、3名のサクソフォーン奏者からなる「クラシック・ジャム・カルテット コンサート」を開催した。コンサートでは1部8曲、2部8曲の合計16曲を演奏し、必修となったサクソフォーン、クラリネット及びジャズ専攻・コースの学生はもちろん、世界最高レベルの演奏を、管楽器を手掛ける中・高校生、一般市民が聴く機会となった。

●今後の展望

世界的な音楽家による演奏会は、今後も継続的な開催を検討する。

【4】 付属音楽院

2018年度の音楽院教養講座の受講者数は2017年度とほぼ同数であったが、従来から1月期における受講者数は減少傾向にある。2019年度は顧客のニーズに沿った新規の講座の立ち上げを検討している。

マンツーマンレッスンは月平均8名の申込者があり、総数は2017年比13%増となった。これはホームページを中心とした広報戦略が功を奏したことによるものと考えられるが、ホームページについては、表記の統一、全体的な見やすさ、講師一覧の掲載などについて更なる改善が必要である。

さくら夙川校の運営は西宮以西の受講者の獲得に成功しているが目標値の達成には至っていない。地域性を踏ま

えた需要を把握し、顧客主体の営業展開と音楽院・大学のPRを引き続き行っていく。

進学コースの在籍者数は計21名であり、2019年度入試では13名が本学へ入学した。またマンツーマンレッスン受講者についても本学入学につながっており、音楽院としての役割を果たしている。

こども音楽講座の新規会員数拡充・定着率向上のための事業

●要旨

こども音楽講座無料体験を2018年4月14日に実施した。また、2019年3月に受講者(中学生以下)の発表会「ミュージックカーニバル」を3日間実施した。

●成果及び達成度

毎年4月に実施しているこども音楽講座無料体験は好評を得ている。2018年度の無料体験は講座のみの実施とし、無料体験者の内12名が新規会員となった。発表会「ミュージックカーニバル」ではレッスン成果の発表を行い、舞台経験を積むことを通じて受講生のモチベーション向上につなげた。本学ミレニアムホールでの発表会は音楽院会員の特典のひとつであるが、来場者を増やすことが今後の課題である。

●今後の展望

これまでの経験を活かして、無料体験及び発表会「ミュージックカーニバル」を実施し、新規顧客層の開拓と受講継続のための仕組みづくりを再検討し、顧客満足度の向上に努める。今後もこどもの音楽教育に重点をおき、体験講座・新規講座の広報を行う。

進学コース充実、改革のための事業/進学コース受講生を対象としたマスタークラス事業

●要旨

- ・シプリアン・カツァリス マスタークラス (2019年2月15日・16日実施)
- ・Daion Piano Grade (6月24日、10月28日、2月24日実施)
- ・進学コース特典 (入学お祝い金、音楽院賞の贈呈)

●成果及び達成度

シプリアン・カツァリス マスタークラスでは、本学客員教授でピアニストのシプリアン・カツァリス氏を迎え、2日間で12名のレッスンを実施した。音楽院進学コース生、本学大学院生、演奏家特別コース在学生在が受講し、進学コース及び大学のPRにも一定の役割を果たしたと考えられる。

Daion Piano Gradeは、ピアノ部会主導で始動したグレードテストが前身であり、本学教員が審査員となり実施したところ、全3回で26名が受験した。受験生が満足できる内容であったが、本グレードの周知方法、グレード取得後の特典など、今後/対応が必要な課題がある。

2018年度の進学コースには、高校1~3年生まで21名が在籍し、高校3年生13名全員が本学に入学した。進学コースのカリキュラムを活用して入学前に音楽基礎科目を着実に身に付けておこうとする受講生が増加し、入学後のスムーズな学修にもつながっている。

●今後の展望

入試事務部門との連携を深めることにより、オープンキャンパスや体験レッスンなど入試関連イベントを通して進学コースの周知に努め、進学コースの受講者を確保する。また、進学コース受講生には、実技や音楽基礎科目を着実に身に付けることに加え、入試制度についても助言を行い、大学入学の準備段階としての適切な対応を取る。

外部施設(さくら夙川校)を活用した事業

●要旨

「すべての方に音楽を学ぶ楽しさを」をモットーに掲げ開設した音楽院さくら夙川校は 2 年目を迎えた。庄内校とは異なるニーズに対応し、キッズスペースや授乳室、おむつ交換台など、乳幼児を連れた人でも気軽に通える環境を整えた結果、受講生は延べ 83 名になった。ただし、まだ目標数には達していない。

主たるイベントとして、「0 歳からのファミリーコンサート」（4 月 7 日、7 月 14 日、10 月 13 日の全 3 回実施）、「サロンコンサート」（4 月から翌年 2 月まで毎月（3 月は都合により中止）実施）、「リトミックレッスン」（毎月 2 回・全 24 回実施）を開催した。

●成果及び達成度

0 歳からのファミリーコンサートについては、西宮地域での需要は非常に高く、さくら夙川校の広報としては十分に効果を発揮した。（全 3 回の総入場者数：0 歳～3 歳 322 名、4 歳以上 498 名、計 820 名）

1～2 歳児を対象とした 1 回完結のリトミックレッスンは、毎月 2 回実施し、開催情報のホームページ等への掲載後、直ちに満席になるほどの好評を得た。音楽が幼少期のこどもに与える影響についての保護者の理解が深まった。（年間総受講者数：1339 名）

サロンコンサートは、大学教員、音楽院講師を中心に 11 回実施した。未就学児も入場可能な午前の部は満席になるが、未就学児が入場不可な午後の部は集客に苦戦している。40 名収容のアットホームな空間、響きの良いサロンでのコンサートをコンセプトに広報展開を再考する。（年間総入場者数：未就学児 213 名 小学生以上 604 名）

●今後の展望

新規受講生（入学者）の増加を図るとともに、西宮市文化振興課との協力関係を築き、さくら夙川校単独で採算が取れる受講生数を確保する。また、入試、広報とも連携し、大学の PR も含めた広報展開をさらに強化する。

C 法人組織運営事業

【1】広報活動

2018 年度も本学の取組みを効果的に情報発信するため、各種媒体・機会を活用し、広報展開の強化を図った。

公式ホームページは 4 月に新たなコンテンツ管理システムの導入により全面リニューアルを実施し、迅速かつ効果的な情報発信ができる環境を構築した。

専攻・コースの活気ある様子を視覚で訴えるべく、ミュージッククリエーション専攻の PR 動画を制作するなど、動画も積極的に活用した。

広告においては Web 関連の投稿量を増加させ、効率かつ効果的な配信を図った。

これらのインターネット関連を主とした広報展開の他、広報誌・リーフレット・ちらしなどの紙媒体、イベント出演、マスメディアへの掲出など各種媒体・機会を活用し、ブランド力の強化、認知度とイメージの向上を図った。

「大学ブランド力」強化を目的とした広報活動について

●要旨

本学及び専攻・コースの認知度およびイメージ向上を図る広報活動を通じ、本学の建学の精神、教育理念を社会に対し発信し、本学の存在価値を高めブランド力強化に結び付ける。

●成果及び達成度

ホームページ、SNS、YouTube などのインターネット活用、広報誌、ちらしなどの紙媒体配布、マスメディアや Web 上での広告掲出、商業施設でのイベント出演など、様々な広報媒体・機会の特性を活かし、本学に関する情報を発信した。特に、ミュージッククリエーション専攻においては、ホームページ刷新によるコンテンツの充実、PR 動画制作によるホームページや YouTube での配信、広報誌でのプロダクション活動記事の掲載、新聞での本学関連

記事掲載における大きな取り扱いなど、新しい分野で学ぶ学生の学習状況を様々な媒体を通じて発信し、時代に対応した音楽大学として積極的にアピールした。

●今後の展望

様々な機会や媒体を活用し、本学の取り組み、在学生の学生生活の充実、教員の魅力を社会に発信し、本学のブランド力強化を図り、入試広報へ好影響をもたらしていくものとする。

公式ホームページのリニューアル

●要旨

公式ホームページに新たなコンテンツ管理システムを採用し、全面リニューアルを行った。

●成果及び達成度

デザインの刷新、コンテンツの再構成、運用管理の機能性向上を図り、情報発信力強化の環境を整えた。

●今後の展望

ホームページのアクセス分析を通じ、メニューやコンテンツの効果的な配置を追求し、志願者層への情報発信力を一層強化していく。

【2】施設・設備

2018年度事業計画に基づき、①既存施設のリニューアル工事、②O3号館の増設、③O号館練習室貸出時間の延長、④コンピュータ関連システムの更新等、施設設備の充実に努めた。また、2018年度は大阪北部地震や台風21号をはじめとする自然災害により校舎その他施設設備に多くの被害を受け、教育環境の安全確保のために優先順位をつけて被害の補修を行った。

既存施設設備のリニューアル工事

●要旨

施設設備の経年劣化対策としてD号館の屋上防水、オペラハウス、O号館の受変電設備の改修、O号館の楽器運搬用エレベーター更新、オペラハウスの音響設備更新、学務事務部門レイアウト変更の工事を行った。また、経年劣化対策及び省エネ対策としてA・B号館の空調更新と、A・B号館の窓の一部を省エネ仕様に改修した。

●成果及び達成度

8月を中心に各種施設設備のリニューアル工事を実施した。学務事務部門A・B号館の窓の省エネ化工事では、国土交通省の既存建築物省エネ化推進事業の補助金を得て、A・B号館全体の約30パーセントの窓をペアガラス及び二重窓に更新し、空調機器の更新を行うことで、省エネ化を実現した。

●今後の展望

A・B号館省エネ化工事については、前年度よりの電力・ガス使用量の変化を確認し、省エネ効果の検証を行う。施設改修計画に基づき、学内施設設備の更新工事を順次行う。2019年度は、経年劣化対策及び省エネ対策として、D号館及び付属音楽幼稚園の空調更新と窓の省エネ化を計画している。

O2号館改修及び施設増設工事

●要旨

経年劣化対策として、O2号館の改修を行った。また、管弦打専攻・コースの学生数増に対応するため、O3号館を増設した。

●成果及び達成度

7月から9月にかけて、O2号館の床、壁、ドア及び更新が必要な空調機器の更新を行った。また、コンテナタイプの2階建て校舎を増設し、管弦打専攻・コース生の楽譜保管や簡単な音出し用に使用するスペースを確保、9月から供用を開始した。

●今後の展望

引き続き教育環境の充実を図る。

O号館練習室貸し出し時間の延長

●要旨

O号館練習室の貸し出し時間について、従来の8時から20時30分を、7時から21時30分に変更した。

●成果及び達成度

学生一人当たりの練習時間確保の面での改善策としては、一定の効果があった。ただし、管弦打専攻生の練習室不足の解決策とまでは至っていない。

●今後の展望

引き続き教育環境の充実を図る。

大阪北部地震・台風被害の補修

●要旨

2018年6月の大阪北部地震では、大学内での人的被害は確認されず、また施設面でも致命的な被害は無かったものの、教室内の楽器や備品等の転倒・落下による破損、校舎内のひび割れ、ザ・カレッジ・オペラハウスの反響板のずれ、屋上設置のGHP機器のずれ等、多くの被害を受けた。また、2018年9月の台風21号では、屋外に設置されている屋上受水槽や門扉、学生サロン「ぱうぜ」前パラソル、幼稚園屋上設置看板の破損等の被害を受けた。

●成果及び達成度

地震直後にはザ・カレッジ・オペラハウス、ミレニウムホール、F号館434教室の照明、緞帳等吊ものの安全点検を実施し、授業や各種公演開催のための安全を確認した。壁の損傷が多くみられたA・B号館及びK号館については、屋内のクラック補修を行った。

台風被害について必要な補修を行い、幼稚園看板については撤去を行った。学生サロン「ぱうぜ」前パラソルについては大阪音楽大学後援会（保護者会）から新たなパラソル4基の寄贈を受け、リニューアルを行った。また、地震による被害はなかったものの、安全基準未達の幼稚園駐車場南東側ブロック塀の撤去及びフェンス施工を行った。

●今後の展望

補修の終わっていない箇所については順次優先順位を決めて補修を行う。また、今後の震災対策として書棚の固定作業等を順次実施していく。

●補助金

幼稚園ブロック塀補修で私立幼稚園施設整備費補助金を受けた。

既存システムの更新

●要旨

老朽化した業務系学内LANのサーバ・ネットワーク機器・学生サロン「ぱうぜ」等フリースペースパソコンを継続利用するため更新した。また時間割編成システムを導入し事務効率化を実現した。

●成果及び達成度

業務系学内 LAN のサーバ・ネットワーク機器と仮想基盤の OS・ミドルウェア、フリースペースのパソコンを更新し老朽化による不具合を解消した。また、エンドポイント対策・不正アクセスログ収集・不正端末検知システムを追加導入することによりセキュリティ対策を向上させた。

時間割編成システムの導入によりデータ一元管理と入出力業務の作業効率化を実現した。

●今後の展望

老朽化した会計システム・業務系学内 LAN 端末（パソコン）を更新する。

職員能力開発研修の実施

●要旨

職員能力の開発を目的に日本能率協会（JMA）等が主催する研修会に参加する。資格取得支援制度についてはスタッフからの申請を事務局会議で精査し、適宜支援を行う。

●成果及び達成度

日本能率協会（JMA）が主催する研修会については、過去 6 年間参加しており今年度については他の研修会への参加の検討を行ったが、参加するまでには至らなかった。資格取得支援制度については、第二種衛生管理者の資格取得のための申請が 2 件あり、受験料・参考図書購入費用等の助成を行った。

●今後の展望

SD 研修については他機関等が行っている研修の情報を収集し、新たな展開を検討する。資格取得支援制度については申請者を増やすため制度の周知を行う。

【3】法人の運営

18 歳人口の減少と本学を取り巻く厳しい環境を踏まえ、本法人の継続的發展と財政の安定を趣旨に、将来のあるべき姿、具体像を検討、議論する「将来構想実現検討・諮問委員会」を理事長直轄の組織として 2018 年 1 月 18 日に設置した。本委員会では、入学者数の増加を目的に「短大の再編 及び 一部短大コース、大学専攻の改編」を主なテーマとして検討を重ね、2018 年 11 月 1 日付で、最終答申が理事長に提出された。この最終答申に対する「常任理事会としての決定事項」（下記①～⑤）、並行して「新入生獲得に関する最低目標数値」（大学 210 名及び短大 120 名とし専攻・コース別に定める）を設定した。

- ① 2020 年度、短大ポピュラーコースを、独自性を持つ「ポピュラーインストゥルメント・コース」及び「ヴォーカルパフォーマンス・コース」の 2 つのコースに分離独立する。「ポピュラーインストゥルメント専攻」の大学への設置は継続して検討する。
- ② 2020 年度、短大作曲コースと電子オルガンコースは募集停止し、発展統合した形の「作曲デザイン・コース」を新規に立ち上げる。
- ③ 2020 年度、大学ミュージックコミュニケーション専攻の 3・4 年次を「地域アートマネジメント（系）」と「舞台技術（系）」に分けたカリキュラムを構築する。1・2 年次はカリキュラムを共有する。（2020 年度時点の在学生に遡及して適用する。）
- ④ 大学における「音楽マネジメント」「音楽ビジネス」を包含した新専攻については、「音楽配信事業」を含め、2021 年度開始を目的として継続して実現の可能性を追求する。
- ⑤ 大学・短大副学長を中心に、新専攻・新コースがどのような成果を上げているかを常時検証できる仕組みを構築する。

「100 周年記念館」が 2016 年に竣工し、2017 年度は既存の校舎・設備の老朽化対策工事の時期に入り、この改

修工事は2018年度も継続することになった。A号館とB号館の空調改修工事、D号館の屋上防水工事、O号館エレベーター工事、O2号館のリニューアル工事、O3号館の新築工事、幼稚園保健室の改修工事、オペラハウスの音響卓・受変電設備の更新、学内LANネットワーク・サーバ・システムの更改等を実施した。

教員の資質や業績を評価することによって教育力や研究力、大学運営能力を高めることを趣旨とし、意欲的に貢献している教員を評価し、本学の更なる発展に繋げることを目的に専任教員の評価制度を導入した。初年度となる2018年度はトライアル期間と位置付け、被評価者への説明会を行う一方、学外から講師を招いて評価者の研修を実施した。2019年度より評価の結果は賞与等に反映することとし、本格的に実施することになる。

今年度は理事会を5回、評議員会を3回開催した。理事会において決定した学校法人の業務並びに理事長の職務を円滑に遂行するために、常任理事会を22回開催し、延べ151件の議題を審議した。各役職者の意思疎通と連絡調整を目的とする執行部連絡協議会を6回開催した。

今年度の教職員数は591名、内専任教員は65名（大学・短大52名、付属音楽幼稚園教諭13名）、専任職員74名。この内年度中の退職者は40名（専任教員3名、専任教諭2名、専任職員4名、非常勤教員21名、その他8名）であった。

「将来構想実現検討・諮問委員会」の運営

●要旨

理事長の要請を受けて「将来構想実現検討・諮問委員会」が組織され、2018年1月18日から11月1日の期間に、指名された教職員（教員4名、職員4名、常任理事1名）をメンバーとして本学の将来あるべき姿を議論し、具体的な方策が議論された。

●成果及び達成度

既存の専攻、コースを発展的に改革するためのいくつかの課題について、建設的な結論が得られたことは特筆に値する。またそれらは手続きを経て可及的速やかに着手されることになった。また結論が得られなかった重要な課題については「新規事業開発室」によって継続審議され、期限を定めて結論を得ることになった。

●今後の展望

課題はそれぞれ教育的な成果を考えながら、志願者にアピールし本学を経営的に安定させる目的をもっているものであるが、そのいずれもが効果的な施策であり今後の成果が期待される場所である。

III 財務の概要

別紙をご参照ください。